

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13331

研究課題名(和文) 尚書学の展開より見た清代・近代学術史の研究

研究課題名(英文) Research on Academic History of Qing to Modern Period China from the Perspective of the Development of Scholarship on Book of Documents

研究代表者

竹元 規人 (TAKEMOTO, NORIHITO)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80452704

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果の概要として、次の3点を挙げる事ができる。清代の尚書学という、従来経学の一部としても先行研究の少ない領域に対する研究を進めることができた。尚書学を通して、清代から近代への学術展開過程を、今文学・古文学の関係、経学と史学の関係、といった問題を軸として、再考することができた。上記の2つの研究を通して、従来中国哲学(史)において区別して研究されてきた、前近代と近代以降の学術を、連続させて論じることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の概要で述べた3点は、清代から近代にかけての中国哲学・学術思想史研究として意義をもつとともに、時代の重層的分析・分野の横断的分析といった点で、方法論的にも意義を有するものと考えられる。また、中国における独自の学術的文脈を明らかにすることは、中国という長い歴史を有する地域を理解するうえで、意義を持つものと言える。

研究成果の概要(英文)：An overview of the results of this research can be summarized as following three points. (1) I was able to advance research on Book of Documents in the Qing period, a field that has had little previous research even as a part of the research of Chinese classic. (2) Through research on Book of Documents, I was able to reconsider the process of academic development from the Qing to the modern era, focusing on issues such as the relationship between old and new texts, and the relationship between studies of classics and those of history. (3) Through the above two researches, I was able to discuss the pre-modern scholarship and the modern scholarship, which have been studied separately in (history of) Chinese philosophy, in a continuous manner.

研究分野：中国思想史，中国哲学

キーワード：『尚書』 清朝考証学 今古文 崔述 段玉裁 きょう自珍 皮錫瑞 顧頡剛

## 1. 研究開始当初の背景

中国は世界のなかで長い歴史を誇る文化圏であり、中国にとっての歴史の重要性は明らかであるが、学問分野としての「史学」は、中国において決して学術的・思想的意味で中核的位置を占めていたものではなかった。漢代以後一貫して中核にあったのは、儒教經典の研究すなわち「經学」であった。

清末には、經書ならびに經学がその中核的地位から降り、歴史・史学が中心的位置を占めるようになった、と言われ、史学(思想)史の研究において、「經学から史学へ」という流れが中国の近代に至る学術思想史の流れとしてこれまでに描き出されている。本研究は中国哲学・經学の一分野である「尚書学」を研究対象として、この命題を新たに考察するものである。

尚書学は清代以降も多くの先賢が大量の労力を投入して発展してきており、尚書学の歴史(尚書学史)についても、これまで少なくない学術書が著されている。ただ、それらはまさに尚書学研究の一環であり、近世から近代への学術思想の展開を明らかにすることを目的とするものではない。上述の問題関心に尚書学という領域から迫ると同時に、尚書学を学術思想史の観点から見直すことも必要である。

## 2. 研究の目的

本研究課題では、尚書学の領域における、「辨偽」と清朝考証学・宋明理学との関係、今文学派の位置づけ、文字・言語研究を通じて的方法的転回、という3つのテーマを柱として、清代から近代への学術展開過程を明らかにしていく。中国学術の近代の変容を示す枠組みの一つとして、「經学から史学へ」という命題が、主に20世紀以来の歴史学の側から提示されてきた。尚書学は經学の一領域であるが、それが上記～の問題を通じてどのように近代以降の学術に展開していくのかを明らかにし、中国哲学の側から「經学から史学へ」という命題を再検討する。本研究により、従来別々に論ぜられることの多かった清代と近代の学術思想史を統合的に捉え、ひいては中国学術史の全体像により近づくことを目指す。また、經学の一領域としての尚書学を、思想史・学術史の文脈につなげることも意図する。

## 3. 研究の方法

本研究の特色として、次の4点の方法がある。

(1)時代の重層的分析。従来の研究においては、清代学術と近代学術は別々に論じられることが一般的であった。本研究では、複数の時代を跨がり、時代間の展開・連続性を重層的に分析する。

(2)近代における清代学術評価への着目。中国近代学術は西洋近代学術の輸入という側面と同時に、中国伝統学術の再編成という側面を持ち、その意味で前近代、特に清代学術への評価と再認識を前提とするものであった。本研究では、清代・近代学術への俯瞰的視座とともに、近代以来の認識史として清代学術を捉える視角をそなえるものである。

(3)人物の複合的分析。本研究では、学術の展開を全体的・整合的に把握するために、従来並べて検討されてこなかった人物についても、比較して扱う。

(4)分野の横断的分析。本研究では、史学・哲学等特定の学科の展開という形で学術史を跡づけるのではなく、人物が具体的にどのような作業を行っていたのかを注意深く読解していく。その上で、それが結果的にどのような学問分野に展開していく可能性があり、近代においていかなる評価を受けたのか、考察する。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、次のようにまとめることができる。

(1)崔述(1740-1816)と、ほぼ生没年が重なる段玉裁(1735-1815)の、『尚書』の扱い方の比較に取り組んだ。崔述の『考信録』における『尚書』の引用、崔以前に積み重ねられた通行本尚書への懐疑を明晰に論じた『古文尚書辨偽』を主な対象とし、崔述の議論の進め方、判断の根拠、依拠した文献等について分析を進めた。段玉裁については、先行研究を参照しつつ『古文尚書撰異』の所論を主に検討し、それが崔述の議論とまったく交わらないことの意味と、方法面での共通性を考察した。

崔述と段玉裁の両者はまったく同時代人でありながら、接点は全くなかったと考えられる。崔の学問の方法については、段に代表される清朝考証学の主流との共通点を指摘する見解と、

相違を指摘する見解と両方見られるが、以上の検討に基づいて、その異同に関してより詳細かつ具体的な見通しを得ることができた。中国近代学術においては、崔述と段玉裁はともに重視されたが、それぞれに言及する際の文脈の異同に関して、今年度の研究によって得られた崔・段の学術の異同に関する認識に基づいて、新しい分析視角を得ることができたと思われる。

この研究成果の一部は、崔述の偽古文尚書に対する認識を、梅鷟(1483 頃-1553)、閻若璩(1636-1704)、惠棟(1697-1758)ら先行する辨偽の成果と比較した論文として発表するとともに、京都大学における国際研究集会「『尚書』解釈の過去と現在」を開催して報告を行った。

(2)19 世紀の今文学派の『尚書』認識について研究を進めた。龔自珍(1792-1841)・魏源(1794-1857)らの『尚書』に対する見解が、それまでの『尚書』に関する議論をどのように修正するものであったのか、また、そうした見解が近代以降の經学(史)研究にいかにつながっているのか、見通しを得た。魏源の『書古微』、皮錫瑞(1850-1908)の『經学通論』中の『尚書』関係部分、『今文尚書考証』、康有為(1858-1927)の『新学偽經考』などについて、先行研究を踏まえながら、それら著作の方法および論旨をたどるとともに、その中で言及された、先行する『尚書』関係著作への評価や態度に着目し、研究傾向や見解の比較を試みた。今文および古文『尚書』に対する認識、文献に対する判断、前提となる学術史的認識、考証において着目・重視するポイント、それらの学術史的意味、などが論点である。

(3)言語・文字・文法の視角からの『尚書』解釈について、『古書疑義舉例』を著わした俞樾(1821-1907)の『尚書』に関する見解、清末から民国初期に至る中国語文法研究関係著作の把握、1910~20 年代に提唱され取り組まれた、文法の観点よりする『尚書』研究を対象とし、こうした方法が、従来の文献考証の方法とどのように組み合わせたり、新しさを持ったか、先行研究を踏まえつつ、検討を進めた。

(4)「經学から史学へ」という命題の再検討として、『尚書』を含む經書等の伝統的な書物が近代にかけてどのように位置づけ直され、図書分類や学問体系の展開・転換がどのような過程をたどったか、という問題を考察した。2021 年 3 月に京都大学人文科学研究所の共同研究班においてオンラインの研究集会を企画し、趣旨説明を行い、目録学の観点から清代から近現代にかけての学術の構成に関する問題を提起したが、「經学から史学へ」という命題の再検討に関する議論を示した点で、本研究課題の成果を反映したのもでもあった。

顧頡剛(1893-1980)の、早年の読書筆記を分析することで、顧が清末民初の読書環境の中で、經学を中心とする学問と書物の体系から、章学誠(1738-1801)・章炳麟(1869-1936)の目録・平議(批判評論)の学や哲学を経由しながら史学へ進むに至った過程を跡づけ、その成果を論文として執筆した(現在査読中)。本論文により、清代以来の学術が近代の学術にどのように展開したのかという、本研究課題の主要な問題関心について、一定の成果を得ることができたと思われる。

(5)その他、2019 年 3 月初旬に台湾の中央研究院において、近年の台湾における尚書研究に関し、資料調査および研究者に対するインタビューを行った。研究の経過と現状・課題を理解することができ、本研究の方向についても有益な示唆を得ることができた。

以上、総じて、次の成果が得られた。清代の尚書学という、従来經学の一部としても先行研究の少ない領域に対する研究を進めることができた。尚書学を通して、清代から近代への学術展開過程を、今文学・古文学の関係、經学と史学の関係、といった問題を軸として、再考することができた。は、従来中国哲学(史)において区別して研究されてきた、前近代と近代以降の学術を、連続させて論じる道筋となるものでもあった。この は、本研究実施者の今後の研究の基盤となるとともに、中国哲学・思想史研究の方法論としても意義・重要性を持つものと考えている。

本研究の研究期間を通じて、いまだ発表に至っていない成果については、今後も整理と発表を継続して行う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹元規人	4. 巻 60
2. 論文標題 崔述「古文尚書辨偽」略説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福岡教育大学国語科研究論集	6. 最初と最後の頁 11-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 竹元規人
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 中国学術史と文献学 章学誠の学術構想を起点として（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹元規人
2. 発表標題 崔述の『尚書』論
3. 学会等名 『尚書』解釈の過去と現在（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------